

二つの「グロンガーの丘」と「田舎の散策」

吉 田 泰 彦

ジョンソン博士はジョン・ダイアー [John Dyer] について、「作家としての規模や名声から言って念入りな批評を要する詩人ではないが『グロンガーの丘』 [*Grongar Hill*] は彼の作品のうちで最良のものである」と前置きした上で、次のように述べる—

it is not indeed very accurately written; but the scenes which it displays are so pleasing, the images which they raise are so welcome to the mind, and the reflections of the writer so consonant to the general sense or experience of mankind, that when it is once read, it will be read again.

実際のところ、この詩はそれほど正確な書き方をされてはいないが、描かれている景観は気持ちよく、それぞれの景観が喚起するするイメージは心地よい。そして、作者の所感は人間一般の感覚や経験とよく調和するので、この詩は一度読んだら再読したくなるであろう。¹

「グロンガーの丘」について要点をおおよそ網羅していると思われるジョンソンのこの評価は、今でもなおこの詩の批評のベースとしても通用すると感じられる。そして、本論考は大局的にはジョンソンの見解に沿う形で、筆者自身の考えを示しながら話を進めたい。²「グロンガーの丘」とピクチャレスクというアプローチはジョンソン評とも矛盾するものではないが、上記記事を含む『英国詩人伝』3巻(1779年)はギルピンの『ワイ川紀行』の出版(1782年)を目にすることなく執筆されたと推測される一方で、彼は1774年にGwaenynog Hall (Denbighshire, Wales)を訪問していること、あるいは、1770年代初期から旅行記を公刊し始めたThomas Pennantによる『ウェールズ旅行』(1778年?)は疑いなく読んだであろう—ジョンソンは1778年にペナントに

について「私が読んだ中で最良の旅行家ですよ。彼は他の誰よりも多くの事物を観察します」³と述べる—から、ウェールズの風景について一定程度の経験と知識を備えた人の所見とみてよいだろう。

ジョンソンが「それほど正確な書き方をされてはいない」と述べる時、厳密にどの部分を指しているのか不明であるが、「グロンガーの丘」は、例えばポープの、ほぼ同時代作品というべき、『ウィンザーの森』(1713年)と比較しても、かなり奇妙な、独特の構造をもっていると言っているだろう。「グロンガーの丘」については3つのバージョンが知られているが、⁴本稿ではダイアーの校閲を経ていると思われる、2つの出版されている版を使用することにする。2つはともに1726年に複数の作者による雑録集の中に収録されて発表されている。厳密な証拠はないようだが、通例先行版として扱われているのが「オード版」、続いて制作されたのが「8音節版」と呼ばれている。2つの版で使用されている韻律については、「オード版」は基本的に弱強四歩格と五歩格、ごく稀に六歩格、加えて強弱四歩格、と相当不規則とみていいだろう。対する「8音節版」は弱強四歩格と強弱四歩格とはるかに整理されている—おそらくこのシンプルに整った韻律は、こちらを後発版とみる大きな根拠となっているのではないかと考える。ドズレー編集・発刊の『詩集』(1748年～1782年)や『ダイアー詩集』(1761年, 1770年)はいずれも「8音節版」のみを収録している。⁵現代の書籍、エドワード・トマスの『ジョン・ダイアー詩集』⁶や英詩案内書などほぼ全ての書籍は「8音節版」を標準テキストとしている。両方を収録するのは少数のダイアー専門の文献⁷にすぎない。Garland Greeverは二つの版を取り扱う数少ない研究者の一人で、彼女の論考“The Two Versions of ‘Grongar Hill’”において、入手の困難な「オード版」全編を提示しつつ比較検討する。⁸とはいうものの、最終的には「8音節版」の優位性の再確認に終わっているという印象を受ける。筆者は「オード版」と「8音節版」は同一のテーマについて書かれた、多少ともアプローチの異なる、二つの作品と見る立場に立つ。結論的には、かなりの量の共通するアイデアや言い回しを含むものの、後者が前者より独り立ちし得るほど圧倒的に高品質であるとは考えにくく、「グロンガーの丘」の真価は両者が補完しあったところにある、と考えるからである。

ジョンソンの言う「それほど正確な書き方をされてはいない」、あるいは、「この詩は一度読んだら再読したくなる」という感慨は、おそらく、大方の読者が抱く読後感と憶測されるが、このことと幾分かでも関係している第一の要因は両「グロンガーの丘」の構造にあると筆者は考える。本稿末尾には、それぞれ Savage 版と Lewis 版を原本とした「オード版」と「8音節版」のテキスト、および、和訳を収めた。Lewis 版には改行もパラグラフ番号もなく、パラグラフの第1行にそれぞれ字下げが施されているのみであるが、便利のために改行、および、パラグラフ番号を追加した。また、両版に行数字を施した。和訳は原文の行と対応しない場合があるので、本稿の議論において行数字を示す場合は原文の行を指すこととする。

まず両方の版に共通して断定しても過つことはないであろうとほぼ確信できることは、主人公の経験を歌う詩作品に通例明示されるはずの時系列が、かなり不明瞭ということである。「オード版」第1-3連は、動きはあるものの、一つの連続した状況を記していると推定されるが、第3連で発生している事態は第4連とどのような関係があるのだろうか。言い換えると、25行目の“the Mountain”は14行目で“Thou, awful *Grongar*”と呼びかけられているグロンガーの丘を指すようだが、51行目の“the Mountain”は同一物を指すのだろうか？それとも、別の山であるのか？同一物だとしたら、18-19行目において、小川のそばで休憩している主人公はグロンガーの丘を一旦降りて33行目でもう一度登ったのか？なぜなら、第4連は主人公は山上に位置して、そこから見えている眺望あるいは景色が描かれているらしいと憶測されるからである。「8音節版」でも事情はほぼ同じで、冒頭で呼びかけられる「黙した妖精」が誰を指すのか、そのうちどうなったのか不明だが、仮に、19-26行目に現れる主人公の属性である“Contemplation”「思索」あるいは「想像(力)」を指すとして—「オード版」の冒頭で記された“*Fancy!* Nymph”を同格語の言い換えと解釈すれば—主人公は冒頭で丘の上にいるかと思えば、19-22行目では少なくとも山腹まで下りてきているようであり、31-40行目ではかなり高い位置からの眺めが描かれているらしい一方で41行目で丘あるいは山の頂上にいるようだ。そして、「オード版」25-32行目と「8音節版」41-48行目が対応す

ると考える理由は、両者が山頂からの広々として、曇りのない眺めを取り扱い、以下の言葉遣いにかかなりの類似を見出すことができるからである。

Th' unbounded Landskip softens off below;
 No skreeny Vapours intervene;
 But the gay, the splendid Scene,
 Does Nature's smiling Face all *open* show,
 In the mix'd Glowings of the tinctur'd *Bow*.
 [オード版 26-30.]

What a Landskip lies below!
 No Clouds, no Vapours, intervene;
 But the gay, the open Scene
 Does the Face of Nature show,
 In all the Hues of Heaven's *Bow*!
 [8音節版 42-46.]

さて、両者ともタイトルは“Grongar Hill”とされているのであり、おおよそはこの丘に関する叙景詩であることを前提に取り組み始めた読者には、主人公あるいはそのアバターらしい存在が丘から降りてまた上るとするのは、分かりにくい行動であろう。それはさておき、「オード版」1-24行目では“the Eminence” (2), “aweful *Grongar*” (14), 「8音節版」1-40行目では“the Mountain[’s]” (3), “*Grongar Hill*” (13), “*Grongar*” (15), “*Grongar*” (17), “his [chequer’d Sides]; (17行めの“*Grongar*”を指すとみられる)” (27), “his [Brooks and Meads]; (同前)” (28)に場所を表記する言葉が登場することから、二つの詩が同一主題に基づく変奏であると仮定すれば少なくとも一つの場所 (“topos”) をめぐる仕上がりとの推定が可能になってくる。さらに、このような推定に立って「8音節版」の該当箇所を注意深く再読すると、主人公が必ずしもただいま現場にいるというより、古典文学にしばしば見られる詩神への助

力祈願 (invocation) の一形態の可能性を意識するであろう。また, “oft I have ...Sate upon a flow’ry Bed” (19-21) が過去の習慣的行動を表現することに気づくならば, “*Phoebus...Gives Lustre*” (11-12), “*Grongar Hill invites my Song*” (13), “*Sweetly musing Quiet dwells*” (16) もまた習慣的な意味合いを含むであろう, と推察できる。同様に, “About his chequer’d Sides I wind...leave his Brooks and Meads behind” (27-28) が習慣的行動であるとすれば, その後に続く “*Groves, and Grottoes where I lay*” (29) はおそらく単なる過去というより過去の習慣 (“I used to lie”) と考えるのは容易である。他方, 「オード版」でそれほどヒントを見出すのは難しいかもしれないが, “*Fancy! Nymph, that loves, etc.*” (1) に続く “*Thou! that must lend Imagination Wings... all worldly Things!*” (5-6) に加えて, “*More than Olympus...Thou, awful Grongar!, etc.*” (11-14) に至ると古典文学の助力祈願をウェールズのグロンガーの丘に転移させているのであるから, この後に描かれる第3連 (25-32) はある時, ある人の見た光景というより, 時間的・空間的な制限を一定程度緩めた理想風景に近づいているとみるべきではないか。なぜなら, 150メートルほどの山頂からの眺望が, 固定された眺望点 (vantage point) に立つ有限の視力を持つ人間に対して, 「果てしのない風景」を提供したり, 「景色を遮る霧が消え去る」ことは実際上ほとんどあり得ないと思われるからである。

ただ, 二つの「グロンガーの丘」を叙景詩とみる時, ダイアーの風景描写の正直さを強く感じさせるのは “*Southward...The Vale grows liberal, and the Prospect wide*” (オード版 77-78), “*See on the Mountain’s southern side,/ Where the Prospect opens wide,*” (8音節版 114-15) であろう。各種地図を利用するとカーマーゼンシャー [Carmarthenshire] の首都, カーマーゼンの東 15-6 キロにグロンガーの丘が位置している。グロンガーの丘と文字通り「目と鼻の先」にあるアバグラスニー [Aberglasney] (ダイアーの兄ロバートが父から受け継いだ地所) は東西に走る A40 道路にほぼ隣接して, とともに南側にあり, 全体的に見ると南側は緩やかな下り加減でグロンガーの丘からは未広がり眺望が得られる (収録地図参照)。他方, 北側は全面的に山また山の山陵地帯によって占められていて, 例えばグロンガーの丘から 2 キロほど西に位置

する A40 道路沿いのコート・ヘンリー [Court Henry] からダイアーの生地ランヴァニーヅ [Llanfynydd] まで二つのルートを道なりに北上すれば 5 キロ前後の距離だが、どちらも曲がりくねって、上り下りのある山あいの道路であるため途中で見えてくる景色は相当変化に富んだものとなる。グロンガーの丘から得られる景観の中には、頂上にある廃墟となった城跡はもちろんのこと、詩の中で明示されている山腹の木立、極度に湾曲するトウイ川、生垣に区切られた牧草地に加えて、近隣の丘に残る同じ崩れ落ちたドゥリスリン [Dryslewyn], ディネヴル [Dinefwr], カレグ [Carreg] 城などが含まれる。これらが合わさって見事に調和を奏する風景を作り出しているという点からは丘の南側を取り上げるのは、ダイアーが地理的な正確さに意を用いていることの表れである。そして、収録した地図を見れば容易にわかるように、東西の方面もまた十二分に開けているので、朝夕の日の出、日の入りの時刻の風景は、二つの「グロンガー」詩にたっぴりと採り入れることが可能になる。そしてまた、丘の南側を占める、遠くの山並みに囲まれた平野の風景は、M. T. Griffin の言う「クロード風の〈調和した〉風景」であることは否定し難いであろう。Griffin は「グロンガーの丘」には、これと対立的な、もう一つの特徴である「サルヴァートル風の情緒喚起的風景」、すなわち、巨大かつ凶暴さをもつ物体が前景を呑み込むような不条理な自然が存在すると主張して次の一節を指摘する⁹ —

As Circles on a smooth Canal:
 The Mountains round, unhappy Fate,
 Sooner or later, of all Height!
 Withdraw their Summits from the Skies,
 And lessen as the others rise:
 Still the Prospect wider spreads,
 Adds a thousand Woods and Meads,
 Still it widens, widens still,
 And sinks the newly-risen Hill.

[8 音節版 32-40.]

この一節に描かれていることは視覚を楽しませてくれる〈複数の異なる景観〉などではなく、同一視点から観察される一つの地形がまるで地殻変動によるかのように、数千もの森や牧草地が視界に現れたり、つい今しがた聳え立ったかと思えた丘があつという間に沈んでいく、という終末論的な、しかも、おそらくは、長大な時間の中で発生する類の事態である。ここで繰り上げられる風景の変化には、被害者は登場しない。ただ巨大な地理的変動が、人や動物の存在を感じさせない無音の中で、パノラマのように発生しているように感じられる。ダイアーが脈絡も与えずに無造作に振り撒いた恐怖のヴィジョンは、Griffinが言うように、不条理な世界に違いない。破壊的な力に圧倒された観察者は（存在するとして）、安定した自然界において求めるはずの美を、景観の中に探す余裕など持てるはずもなく、おそらく、発狂しそうになるような恐怖の中で、無言のまま、眼前で発生している光景に精神を吸い込まれているのであろう。風景に対する感慨や感想といった文明世界に住む語り手の反応がどこかに吹き飛ばされたかのように、かけらも表現されていない。例えば、幾分類似する風景を描いているらしく感じられる8音節版 103-108 行には、ここで感じられる、刺すような毒のある調子は聞き取れない。その大きな理由は後者の景観には“*Ever charming, ever new,*” や “*warm and low*” といういわば解毒剤（観察者の温かい感情）が添えられているからであろう。読者がこの6行に接したら、最後の2行のイメージに〈崇高〉(sublime) の印象を受けるかもしれないが、人類生存以前に発生していた太古の〈混沌〉(chaos) を感じ取るであろうか。

Ever charming, ever new,
 When will the Landskip tire the View!
 The Fountain's Fall, the River's Flow,
 The woody Vallies, *warm and low*;
 The windy Summit, wild and high,
 Roughly rushing on the Sky!

[8音節版 103-108. イタリックは筆者。]

オード版には8音節版 32-45行に厳密に対応する記述は見当たらないが、わずかに調和的なトーンで書かれた、上記一節の原形と推測される詩行は以下の通りである—

Ever *changing*, ever *new*,

Thy Scenes, O *Grongar!* cannot tire the View:

Lowly Vallies, waving Woods,

Windy Summits, *wildly* high,

Rough, and rustling in the Sky!

[オード版 67-71. “*Grongar!*” を除き、イタリックは筆者。]

8音節版ほど観察者の心を慰撫する用語は用いられずに、むしろ〈不機嫌な〉風景と言うべきだが、美景ハンターとしてではなく、その時々の人間の在りようが引きずっている心理的、感情的な諸々に影響される観察者の感じ取った、恐怖も与えないが、かといって、楽しませてくれるところもない、無愛想な風景である。このように不機嫌で無愛想な風景の行き着く先は8音節版では明記されている—

Yet Time has seen, that *lifts the low*,

And *level lays the lofty Brow*,

Has seen this broken Pile compleat,

Big with the Vanity of State;

But transient is the Smile of Fate!

[8音節版 84-88. イタリックは筆者。]

「時」は諸行無常を、はるか昔から遠い未来に至るまで、出来事には一切関わることなく、感情を湧き立てることなく、あくまでも傍らで眺めている非人情な存在である。それに対して、「自然」ははるかに情け深く、人間に寄り添ってくれる—

Thus is Nature's Vesture wrought,
To *instruct our wand'ring Thought*;
Thus *she dresses green and gay*,
To *disperse our Cares away*.

[8音節版 99-102. イタリックは筆者。]

一方であちこちをさ迷う心に人とは滅びゆく生き物なり、というおのれの本質を教え、他方で憂いを払うために美しい彩りの衣を纏う「自然」は導き手であり、慰安者、治癒者として、人間にとって「時」とは対極的な役割を担っている。

ところで8音節版 32-45行目をグロンガー、ドウリスリン、ディネヴル、カレッジなどの丘の展望に関する実際的な描写と取ることはほとんど不可能である。平地に立つという2-3百メートル級の丘の山腹を上り下りしたところで、「何千の森と草がつけ加わる」こと、「新たに立ち上がった丘が沈む」光景などが少なくとも肉眼に映ることはあり得ないことを考えると、後半のテーマである「自然界と人間世界における宿命の甘受」という教訓への布石であることは容易に推測できる。ただダイアーが普段現実から遊離したモラリストではないこと、この詩自体も何らかの実体験にヒントを得た叙述に満ちているらしいことを考慮すれば、生身のダイアーの経験と何らかに関連するのではないかという憶測に駆られる。このようにラディカルな出来事が起こり得る環境は、例えば、起伏があり、視界が次々と変化する山間の地形でなければならぬとすれば、おそらく、成長期に山奥の生家から町場へ行き来した折に何度も目にしたであろう、平地ではあり得ない頻繁に、しかも激烈に変化する情景が、画家の素質をもつダイアーに視覚的に強く、永続的な印象を植え付けたのかと推測される—屋上屋を架すことを恐れなければ、このような原体験に恐怖の意味づけをするきっかけになったのは、イタリアからの帰国後、将来への希望を失う原因となる大病が影響して、ダイアーはかなり悲観主義に傾いたことが大きな要因ではないかと疑われる。この後で見るように、この詩の特質は確かに自然美を歌う眺望詩であるが、多彩な景観を含む眺望は最終的に悲観主義的なモ

ラルと結びつき、結論部では、ミニマリストティック的とはいえ、自然環境との共生へともう一度戻るパターンをもつ。

8音節版第5連は山上からの眺望の描写から始まる。主人公が取る位置は第1連でグロンガーが明示されて第2～4連はその場所にとどまっているとみられるから、場所は引き続きグロンガーであろう。ただ、第5連中頃で“a dark hill” (67) が登場し、文脈からすると別の丘と考えるのが順当であり、グロンガーの眺望の中であってトウイ川沿いとなるとディネヴル城丘かドウリスリン城丘のどちらかであろうが、67-76行の描写にはどちらかに決めなければならないほどの特徴が記されているようにはみえない。「暗い丘」と書かれているのみで城の名前が明示されていないことから、指定することにダイアーが意味を見出していたかどうか疑わしくなる。文章による風景描写に絵画的構成と原理を求めている W. ギルピンは『ワイ川紀行』において、“Whose ragged Walls the Ivy creeps” (73) について、絵画的描写の原理・原則からの「逸脱」(transgressions) との苦情を画家でもあるダイアーに申し立てている。¹⁰ 数キロ離れたところに垂れ下がっている蔦がグロンガーの丘から肉眼で見えるはずはないわけであるし、見えるように書くことは前景化することになるという批判であるが、直後に続く第6連で展開される〈廃墟論〉の前奏曲がすでに始まっているとみるべきであろう。“awful Look” と “mutual Dependance” には人間的な響きが強く感じ取れるはずである—

And antient Towers crown his Brow,
That cast an *awful* Look below;
Whose ragged Walls the Ivy creeps,
And with her Arms from falling keeps;
So both a Safety from the Wind
On *mutual* Dependance find.

[8音節版 71-76. イタリックは筆者.]

ついでながら、同書の同ページにおいて記された“purple Grove” (63) につい

ての批判もまた、ギルピン流の誤解に基づいているようである。人生の黄昏を自然環境と事物に結びつけようとするこの詩の時間設定をダイアーが、注意深く、夕方としているらしいことを考慮すれば、“purple Grove”は遠景の靄の色が意図されている（ギルピン説）とみるより、赤みがかった夕焼けの色と解するべきであろう。

すでに言及した「グロンガーの丘」に流れる道徳論的な悲観主義の背後に見え隠れする個人的な事情の存在を窺わせる一節に注目して、制作時のダイアーの置かれた状況、及び、二つの「グロンガー」の版の相違の一端に触れることにする。対照のために以下に示す二つのパートは、使用されている用語、表現されている概念の高い類似性から、どちらが先に制作されたにせよ、互いに参照し合う関係にあることは明らかに見てとれる。

O may I with my self agree,
 And never covet what I see:
 Content me with an humble Shade,
 My Passions tam'd, my Wishes laid;
 For while our Wishes wildly roll,
 We banish Quiet from the Soul:
 [8 音節版 129-34.]

O, may I ever with my self agree,
 Nor hope the unpossess'd Delights I see!
 Nobly content, within some silent Shade,
 My Passions calm, and my proud Wishes laid:
 Ne'er may Desire's rough *Sea* beneath me roll,
 Drown my wish'd Peace, and *tempest* all my Soul!
 [オード版 91-96.]

二つのパートからの相互参照箇所 “what I see” と “the unpossess'd Delights

I see”, “Content” と “Nobly content”, “our Wishes” と “my proud Wishes”, “We banish Quiet from the Soul” と “Drown my wish’d Peace, and *tempest* all my Soul” を比較対照して、簡潔で金言的な表現と軽快なリズムを採るならば 8 音節版に、より詳細で具体的な内容、論説調の重厚なリズムを採るならばオード版に、軍配が上がるであろう。自身の内実に切り込んで、分析し、苦痛の種を抉り出さんばかりの詳細かつ鋭敏なオード版の描写は、用いられる荒海の比喩が適切であり、最後まで一人称単数表現を貫いているのに対して、8 音節版の紋切り型に傾いた叙述はやや平板で、途中から一人称複数表現に移ることによって事態はより一般化され、個人の苦痛の度合い、切迫性は弱められる—これには基盤となっている韻律の違い、すなわち、8 音節版の弱強四歩格に対するオード版の弱強五歩格も大きく影響を与えている。四歩格は五歩格と比べてテンポが軽快であり、またこのような書き方であれば、説教臭さを免れることは可能であるが、他方、「微に入り細を穿つ」ような精密な描写をすることは難しい。二つの詩行のパートを比較することによって、ダイアーが二つの韻律における表現の可能性をしっかりと把握して、その枠内でできる限りの成果を収めたと筆者は考える。ただ、時代を経るごとに好みはますます前者に向かい、後者の書き方は大仰で重苦しいと受け止められるようになっていくことは致し方がないことであり、仮に 8 音節版が後に制作された改良版だとすれば、ダイアー自身も好みの変化を感じ取っていたことになる。

ダイアーは「オクリキュラムにて」(“Written at Otriculum, in Italy, 1725”)—題名が示すように、イタリア滞在中の作品だが—において、画家修行をしていた時分の心の揺れを記している。一人称で自分自身の経験を綴り、叙述もかなり直截的で、内心の告白を吐露する作品である。編集者の Willmott によると二つのバージョンがあり、初めのは 8 音節版 (1725 年)、もう一つ (1730 年) は彼の詩集に収録されているものであり、¹¹ こちらは弱強五歩格で書かれている。前者は目にしたことはないが、後者については、五歩格のリズムとゆったりとした論述的な内容がぴったりと適合してよい出来栄えに仕上がっていると思われる。詩の冒頭でイタリア、オトリコリ [Otricoli] の廃墟のそばで写生に励む自分の姿を叙述する—

with *laborious hand*,

Figured, in picture, of the solemn scene

The gloomy image: *studious to excel*,

Of *praise and fame ambitious*:

[オクリキュラム 5-8. イタリックは筆者.]

「賞賛と高い名声」を追い求める精神は、人の希求する目標として「グロンガーの丘」にも登場する概念であるが、「勤勉に働く手」や「傑作のために精を出す」などのリアリスティックな描写を挿入することによって特定の〈個人の物語〉を記すことが可能になっている。他方で、自己に鞭打って社会的成功のために邁進する画家の心の目に、賢者らしき老人が現れて、ローマの数々の遺跡を観察・研究してきた主人公の経験を逆手に取るようにして、一つ一つの手の込んだ記念碑や建築物どころか、国家や言語さえもが滅亡していく「時」の暴力の前では、紙や布の上に描いた画家の労苦の成果などはものの数には入らず、明日をも知れぬ運命にあること、したがって、のんびりと楽しい安逸の人生を選ぶように勧める—

Were it not better in the arms of ease

To lie supine? or give the soul a loose,

And frolic join, in song and riant dance,

The sons of luxury? *Pernicious voice!*

Which soon with soothing sound may sweetly lure

Thy weary nature, yielding.

[オクリキュラム 60-65. イタリックは筆者.]

これに対して、主人公は「有害な声」(63)と一喝するのだが、苦勞を避けて楽な道に逸れさせようとするばかりか、文明の崩壊まで持ち出してそれを正当化する、怠惰で狡猾なもう一人の自己を「賢者」(“a seer” 15)として、アレ

ゴリカルに表現する。執拗な自己分析者であるダイアーはこれにとどまらず、甘く誘惑する「有害な声」に「汝の易々と屈する疲れがちの体質」(65)と自分を形容する。そもそも物事を一般論化、総体論化しがちなオーガスタン期の表現の傾向を考えると、ダイアーがここで一個人の状況に限定して語っていると直ちに断定することは難しい。とはいえ、終始「私」が物語の中心人物であり、「汝の易々と屈する疲れがちの体質」に〈より高い自己〉が警告を発する仕掛けであるから、ダイアーは自身の素質あるいは健康状態に、少なくとも間接的に、触れているのではないかと筆者は考える。彼は、既にイタリア滞在中から、不調の気配といったものを感じ取っていたのであろうか。

「オクリキュラムにて」の非観主義的な調子に関係して、R. A. WillmottとR. M. Williamsはともに、ダイアーの健康状態は良好ではなかったと明する。¹²

This passage (lines 22-35) seems autobiographical on Dyer's part and supports Willmott's statement that "his health, never vigorous, was greatly injured by the air of the Campagna." There can be little doubt, I think, that Dyer had some serious illness while he was in Rome; he may even have been sick during his stay in Ocriculum.

ローマ近郊のカンパーニャは元々湿地を埋め立てた土地で、元来頑健ではなかったダイアーは健康を損なったとウィルモットは言い、ローマにいる間にダイアーは何か深刻な病気に罹患したことはほとんど疑いないとウィリアムズはみている。ただし、ダイアーがイタリアから母に宛てた手紙では、帰国後ロンドンで画家として活躍して立派に生計を立てられるくらいの絵画の知識は習得したと記すものの、今ひとつ将来に関する彼自身の意図が不明確なところが見えることも否定できない—“I have gathered, I thank God, enough of knowledge in painting, to live well in the busiest part of the world, if I should happen to prefer it to retirement”¹³—最後の「隠棲する」—おそらく、故郷ウェールズのカーマーゼン近辺で世に知られずに一生を過ごすことを意図していたであろうが、ダイアーの人生観に基づくものか、健康上の問題が絡んで

いるのか、更には両方なのか今ひとつはつきりしない。

次には、同じく帰国直後、すなわち、おそらくは危機的な状況に陥ったダイアーが制作したと考えられる「田舎の散策」[*The Country Walk*]—前出 Savage 編 *Micellaneous Poems* に収録—を、いくつかの点から両「グロンガーの丘」を照らし出す姉妹作とみて関連性を検討する。「グロンガーの丘」はオーガスタン詩らしく個人的な色彩はかなり薄められ、ペシミズムといえども相当程度一般化されているのに対して、「田舎の散策」はロマン主義詩ほどとは言えないまでも、より一層ダイアーの人間観あるいは個人的な状況が見えやすい形で記述されている。したがって芸術的昇華度が高く抽象性を帯びた「グロンガーの丘」は後者と対照することによって、幾分とも伝記的なレベルからの理解が深まるであろう。「田舎の散策」には“Grongar Hill”を始めとして近隣の風景は登場するが、より伝記的な要素としては当時の住居である“Aberglasney”が透明に近いヴェールを被せられて“Abergasney”という名で登場するばかりか、筆者の兄の住居であることは注に断り書きされている—

While, with light Hearts, All homeward tend,

To **Abergasney* I descend.

[152-53.]

* *The Name of a Seat belonging to the Author's Brother.*

あるいは、言葉遣いや発想・表現の近接、描かれる風景の類似にも姉妹作と呼ぶべき点が多々見つかる。例えば、オード版 29-32 行、8 音節版 45-48 行と以下の詩行を対照させれば、このことが実感できるであろう。

What a fair Face does Nature show?

Augusta, wipe thy dusty Brow;

A Landskip wide salutes my Sight,

Of shady Vales, and Mountains bright;

[17-20.]

とはいえ、ここでもまた個別性・具体性を際立たせるわずか1行“*Augusta, wipe thy dusty Brow*”（「オーガスタよ、埃で汚れた額を拭え」）を目立たない形で挿入することによって、主人公と使用人それぞれの立場、仕事、関心事を対照的に示し、さらには、詩人・画家としての主人公の自覚を読者にうっすらと感じさせる効果さえもたらしている。

このような背景に注目して「田舎の散策」を読むと、特に目的のない、気晴らしの散歩や自然観察からたまたま生まれた自然主義的な作品というより、おそらく、当初から何か決まった目標をもって外出して、一日の経験を記録したものと考えられる節がある。

「田舎の散策」の冒頭には、主人公が鳥の囀りの聞こえる、晴れた日の早朝に外出しようとする様子が記されている—

The Morning's fair, the lusty Sun,
With ruddy Cheek begins to run;
And early Birds, that wing the Skies,
Sweetly sing to see him rise.

I am resolv'd, this charming Day,
In the open Field to stray,
And have no Roof above my Head,
But that whereon the Gods do tread.

[1-8.]

何であるか明言されているわけではないが、“I am resolv'd”には何か目的を感じさせる響きが含まれているようである。そして、最後の2行にはさらに強い動機、すなわち、主人公は家屋内では得難い何か、一日を神々とより近く過ごすことによる効果を期待しているらしい様子が窺える。さらに、“the open Field”は農業や家畜のための採草を目的とした囲い地ではない、いわゆる、「野っ原」を指すのであろうが、その「野っ原」を「神々が歩く天以外に、わ

が頭上に屋根をいただかない」場所と呼ぶ。とはいえ、人間の営みを毛嫌いしているわけでもなさそうなことは、この後続けて、おそらく屋敷内で使用人が飼育しているらしい家禽類の描写—幾分ユーモラスで愛情を感じさせる描写—が現れることから推察される。

Before the yellow Barn I see
 A beautiful Variety
 Of strutting Cocks, advancing stout,
 And flirting empty Chaff about.
 Hens, Ducks, and Geese, and all their Brood,
 And Turkeys gobling for their Food;
 While Rusticks thrash the wealthy Floor,
 And tempt all to crowd the Door.
 [9-16.]

余談ながら、この点は詩の中で「独居」(“solitude”)を強調したワーズワスと異なるところと思われる。もちろんダイアーの主人公も基本的に人のいない自然の中で (“And now into the Fields I go,/ Where Thousand flaming Flowers glow” 23-24) ひとり静かに時を過ごすわけだが、少なくとも家の周りで労働に励む人々を、同一の詩の世界から排除してはいない。主人公は人気のない小川のほとりを選んで腰を下ろし、地面に身を横たえる—

A Riv'let gliding smoothly by;
 Which shews with what an easy Tide
 The Moments of the happy glide.
 Here, finding Pleasure after Pain,
 Sleeping I see a wearied Swain,
 While *his* full Scrip lies open by,
 That does *his* healthy Food supply.
 [30-36. イタリックは筆者。]

この一節の中で、“Here, finding Pleasure after Pain”（「ここで、苦痛の後に愉しみを見い出して」）という一句に注目すれば、彼が田舎生活あるいは田園の散策に特別な愉しみを感じるようになったのは、苦痛の経験を経てからであることが明らかになる。引用した一節の最後の3行は散策の目的が苦痛の経験によって被った心身の障害からの癒しであり、現在もおその過程にあることを明快に示している。「彼の」(“his” 35, 36) という言葉遣いに端的に表されているように、彼は「疲れた男」を一步距離を置いて客観的に観察する。「彼の満杯の合切袋」と「彼の健康によい食料」という表現は、眼前に展開する田野の風景が「疲れた男」の健康回復のための栄養であることを主人公自身が感じ取っていることを表している。もちろん、マラリアや肺結核への罹患という見方は現代の科学的な見解で、当時不調の原因について十分に解明されていなかったことを考えれば、ダイアーは現象面から「疲労」と表現したとみることも何ら不合理ではない。さらには、詩人としてのダイアーにとって現状の洞察、治癒経過の観察を綿密に記録・表現することは当然の行為であり、その作業が回復を促進するという二重の効果を狙っていたということも考えられる。「眠りながら、疲れた男を目の当たりにする」の一句には単なる矛盾語法にとどまらず、身体的な症状の奥にあって、目覚めた日常的な意識では気づかない類いの遠因にまで思いを致しているのかもしれない。いずれにしても、この一節には、〈野心を捨てて、無名のまま田舎に隠棲することこそ安らかな一生への道〉[8 音節版「グロンガーの丘」129-34] というありきたりの人生訓には収まりきらない、現実的かつ具体的な個人の事情が明らかに述べられている、と読むべきであろう。¹⁴ その他に、主人公自身が感じている不調に関する言及といえば、“In thorny Tracks of Sorrow stray” [66]（「棘の多い悲しみの小道に迷う」）が該当するかもしれない。あるいは、不調そのものというより、不調に関連して生じる人生への落胆、希望の喪失を表現しているというべきであろう。¹⁵

「疲れた男」は川べりで休憩しながら自身の将来への見通しと健康状態を心静かに振り返りつつ、数時間を過ごした後、真昼の暑い日差しに耐えかねて、木陰へ移動する—

Into the Shade that Groves bestow;
 And on green Moss I lay me down,
 That o'er the Root of Oak has grown;
 Where all is silent, but some Flood,
 That sweetly murmurs in the Wood;
 But Birds that warble in the Sprays,
 And charm ev'n *Silence* with their Lays.
 [44-50.]

木立の中、樫の根本で「緑の苔の上」に身を横たえた主人公は、今度は、森のせせらぎの音と小枝の中で囀る鳥の声によって一層際立つ静寂と一体になって、自分の悩みは忘れているかのようなのである。この一節で表現されている経験と言葉遣いは約 200 年後、ワーズワスやコールリッジによって精錬され、ロマン主義的精神として結実を見ることになる—

And I can listen to thee yet;
 Can lie upon the plain.
 And listen, till I do beget
 That golden time again.
 [Wordsworth, *To the Cuckoo*, 25-28.]

as on the midway slope
 Of yonder hill I stretch my limbs at noon,
 Whilst through my half-closed eye-lids I behold
 The sunbeams dance, like diamonds, on the main,
 And tranquil muse upon tranquillity;
 [Coleridge, *The Eolian Harp*, 34-38.]

さて、「田舎の散策」には、不調への言及以外にも、コンパクトに纏まった両「グロンガーの丘」には見られない、ダイアーの詩人としての幅広さを認識させる、いくつかの項目が特徴となっている。まず、後者で登場する「人」はあくまで人一般であり、ある時不調に陥ったり、他の登場人物と繋がりをもっていたりはしないから、どうしても総体論になりがちである。他方、前者については、すでに見た使用人オーガスタに始まり、古典牧歌に登場する決まりきった役柄とはいえ、主人公の恋人としてのクリーオ（“Clio”）が二度現れる。次に気づくのは、休憩を終えて森の避難所から出てきた主人公が出会う、一人暮らしらしい老人である。掘立て小屋に住み、隣接した菜園に水を引いて作物を栽培する、今にも命の尽きそうな弱々しい隠遁者がボロボロの衣服で身を被い、キャベツを掘り出す様子の描写は、非常に人間的で生々しい—ワーズワスの「ティンタン・アビー」の風景構成にヒントを与えたかと思わせるほど、似た印象を与えるが、「ティンタン・アビー」では畑の痕跡と林の中から立ち上る煙から人間の暮らしを示唆するのみである。さらに重要な登場人物は羊飼いや、および、牛を使って畑を耕す農業に従事する労働者たちであろう。このような種類の人々は「グロンガーの丘」のような整った叙景詩には入り込む余地がない。仮に姿を見せるとしたら、ポープの『ウィンザーの森』におけるように、世の中の構成要素のシンボルとして風景の一角に配置される時くらいであろう（いわゆるピクチャレスクな風景画にはなくてはならない、小さな飾りである）。「田舎の散策」では羊飼いや仕事の合間に休憩がてら笛を吹き、羊たちが彼の旋律を聴こうとして周りに群がる様が、数十年後に最後の大作として発刊されることになる *The Fleece*（『羊毛』）を先取りするかのような筆致で描かれる—

How the Sheep surround their Swain,
 How they crowd to hear his Strain!
 All careless, with his Legs across,
 Leaning on a Bank of Moss,
 He spends his empty Hours at play,
 Which fly as light as Down away.
 [129-34.]

主人公が丸一日の散策，気晴らしを求めるのんびりとした散歩というより，深刻な心身の不調を和らげるために，むしろ強行軍と言っているような自然環境との激しい一体感を求める散策に精力を使い果たして，夕方に帰宅する場面に，一日の畑仕事を終えた農夫たちや放牧から戻ってくる羊飼いたちが一体となって描かれているところに深い意味が込められている—

In Blushes the descending Sun,
 Kisses the Streams, while slow they run;
 And yonder Hill remoter grows,
 Or dusky Clouds do interpose.
 The Fields are left, the lab'ring Hind
 His weary Oxen does unbind;
 And vocal Mountains, as they low,
 Re-eccho to the Vales below.
 The jocund Shepherds piping come,
 And drive the Herd before 'em home;
 And now begin to light their Fires,
 Which send up Smoke in curling Spires!
 While, with light Hearts, All homeward tend,
 To *Abergasney* I descend.
 [140-53.]

「向こうの丘」(“yonder Hill”)は120行目(“See yonder Hill, uprising steep”)で言及される丘を指すと思われるから，すなわち，100行目(“Up *Grongar Hill* I labour now”)のグロンガーの丘であろう。最良の眺望点を求めて上った丘がより遠くにあるように見えるのは，物理的に日が暮れかけていることに言及しているのだが，主人公は目的を終えて心理的にも遠ざかっていることを読者に示唆することになるだろう。「それとも，暗い雲が間に入ってきたのか」はそのようなロマン主義的な解釈へと一気に傾かせずに，実際のな解

積の余地を残しておこうとする作者の配慮であろう—おそらく、当時の感覚として極度に心理主義に傾くことは理知を忘れた感傷主義と感じられたに違いない。

「田舎の散策」の「グロンガーの丘」にはみられない特質、と同時に、ロマン主義に対しても距離を置こうとする特質に目を向けてみたい。次の一節は、丘から眺めた景観が、展望者の興奮ぶりが、直接的に伝わってくるように、叙述というより、描写されているというべきだが、景観を構成する項目に注目したい。

Oh how fresh, how pure the Air!
 Let me breathe a little here.
 Where am I, Nature? I descry
 Thy Magazine before me lie!
 Temples!—and Towns!—and Tow'rs!—and Woods!
 And Hills!—and Vales!—and Fields!—and Floods!
Crowding before me, edg'd around
 With naked Wilds, and barren Ground.
 [102-109. イタリックは筆者。]

Norman Callan は *From Dryden to Johnson* 中の 1 章 “Augustan Reflective Poetry” において、「ダイアーの得手は反芻の能力にあるのではなく、視覚的な経験を記録する能力にある」と述べ、さらに、上記一節を引用しつつ、「記述の言葉と手法は明らかに一部を *L'Allegro* に負っている、とはいえ、ダイアーの目は、ミルトンの目というより、ワーズワスの目である」と述べる。¹⁶ 「田舎の散策」を叙景詩としてみる場合、ここにおいて頂点に達したというべきに違いない。「ああ、何と新鮮で、何と純粋なことか、この空気は / ここで一息入れさせてもらうとするか」(102-103) と、おそらく、癒しに資することを期待する、感嘆の声を主人公は上げるのだが、ダイアーの「自然の宝庫」(“Thy Magazine”)には、森、丘、谷、野原、河川に加えて、明らかに人が関与して

作られた寺院，町，塔が含まれていて，しかも，狭義の自然の要素の前に置かれていることに驚かされる．自然環境に囲まれて十分な年月を経た人造物が展望者にとって自然の完全な一部として「私の前に群れをなして押し寄せてくる」と感じられている．古い建築物に対するダイアーの傾倒には半ば自然と融合し，調和している点にあることが以下の記述から読み取れる—ギルピンにこの見解を読む機会があったとしたら，『ワイ川紀行』(33-34)における「時」と自然の建物に与える影響が人工物に心地よさを生み出すという主張が，百数十年前に表現されていたことに驚きつつも，おそらく，深く同意したことであろう—

There is a certain charm that follows the sweep of Time, and I can't help thinking the triumphal arches more beautiful now than ever they were, there is a certain greenness, with many other colours, and a certain disjointedness and moulder among the stones, something so pleasing in their weeds and tufts of myrtle, and something in the altogether so greatly wild, that mingling with art, and blotting out the traces of disagreeable squares and angles, adds certain beauties that could not be before imagined, which is the cause of surprise that no modern building can give.¹⁷

そして，アバターとして登場してきた語り手は，匿名性を脱ぎ捨てて「詩人」の名乗りを上げ，今から戻るべき居宅が，地所の中にある林，庭園（あるいは菜園），段々の散歩道，東屋，池（あるいは屋敷内に引き込んだ流れ）を含めて，いかに大切なものであり，愛着を抱くものであるかを，静かに記す—

See below the pleasant Dome,
The Poet's Pride, the Poet's Home,
Which the Sun-Beams shine upon,
To the Even, from the Dawn.
See her Woods where *Eccho* talks,
Her Gardens trim, her Terras Walks,

Her Wildernesses, fragrant Brakes,
 Her gloomy Bowers, and shining Lakes.
 Keep, ye Gods, this humble Seat,
 For ever pleasant, private, neat.
 [110-19.]

散策に出発する前の決意であった「神々が歩く天以外に、わが頭上に屋根をいただかない」場所で一日を過ごすことの成果は上がったのであろうか。戻ってきた詩人の目には、屋敷は人工と自然が渾然一体となった姿と映っているようである。「詩人の家」と言明された屋敷には夜明けから夕方まで日の光が降りそそぎ、地所の中には未開墾の原生地や芳香を放つ茂み（“Her Wildernesses, fragrant Brakes”）も含まれていて、前出の「草木の生えない荒野と栽培に不向きな土地に／縁取られて」（“edg’d around/ With naked Wilds, and barren Ground” 108-9）と同じ趣旨であり、個人の地所であれ、個人の所有に関連しない土地であれ、ダイアラーが野生を包含する態度を持っていることを示し、Sir John Denham の政治的アレゴリーが顕著な『クーパーの丘』[*Cooper’s Hill*]、さらには、政治的雰囲気濃厚といえども、より幅広い関心を示すポープの『ウィンザーの森』と比較しても、ロマン主義詩人たちの態度との近縁性をはるかに強いことを示す印の一つと言えるだろう。

注

1. Samuel Johnson. *The Lives of the English Poets*. 2 vols. J. F. Dove. (London : 1826). Vol. 2, 350. Ebook.
2. 今村隆男『ピクチャレスクとイギリス近代』音羽書房、2021年。書名の通り大局を見晴らす傑作。89-94頁ではギルピンのピクチャレスク観の変化を鋭く指摘し、モラルの観念が入り込んでくるとの主張が展開される。岩井茂昭「自然における「不可視のもの」を可視化する試み—ギルピンが『ワ

イ川紀行』に導入した「ピクチャレスク美」の原理について—」（『生駒経済論叢』第12巻第1号，21-45頁，近畿大学，2014年7月，電子版）。26-36頁においてギルピンの立場からみた「グロンガーの丘」が精密に分析されている。また，同氏には前記の他，ピクチャレスクに関する論考多数あり。私が〈ピクチャレスク〉に初めて接したのは10年ほど前に関西コールリッジ研究会において今村，岩井両先生によって盛んになされたご発表を通じてであった。「グロンガーの丘」，あるいは広く，〈ピクチャレスク〉に目を向けるきっかけを作ってくださった両氏に感謝の意を表す。

3. *Boswell's Life of Johnson*. Ed. Charles Grosvenor Osgood. Charles Scribner's Sons. (New York, Chicago, Boston, etc.: 1917). 374. Ebook.
4. *Miscellaneous Poems and Translations. By Several Hands*. Ed. Richard Savage. Samuel Chapman. (London: 1726). 60-66. Ebook. *Miscellaneous Poems By Several Hands*. Ed. D. Lewis. J. Watts. (London: 1726). 223-31. Ebook. ハーフオード伯爵夫人の手書き版はダイアーの同夫人宛書簡からの写しとして次の論考に記されている。Helen Sard Hughes. "John Dyer and the Countess of Hertford." *Modern Philology*, Vol. 27, No. 3 (Feb., 1930), 311-20. Eprint.
5. *A Collection of Poems. By Several Hands. In Three Volumes*. R. Dodsley. (London: 1748). Ebook. *Poems. By John Dyer, L. L. B.* Eds. R. and J. Dodsley. John Hughes. (London: 1761). Ebook.
6. *The Poems of John Dyer*. Ed. Edward Thomas. LLanerch Enterprises. (Somerset, UK: Reprint 1989). T. Fisher Unwin. (London: 1903. Original print). トマスは "Introduction" において，Savage の *Miscellany* の出版を1726年，Lewis の *Miscellany* を翌1727年，したがって後者を最終版とみなし，おそらく詩的品質評価を含めた上で，前者は「重要でない」 ("not significant") と明言する (9)。
7. *Grongar Hill by John Dyer*. Ed. Richard C. Boys. The Johns Hopkins Press (Baltimore: 1941). *John Dyer, Selected Poetry and Prose*. Ed. John Goodridge.

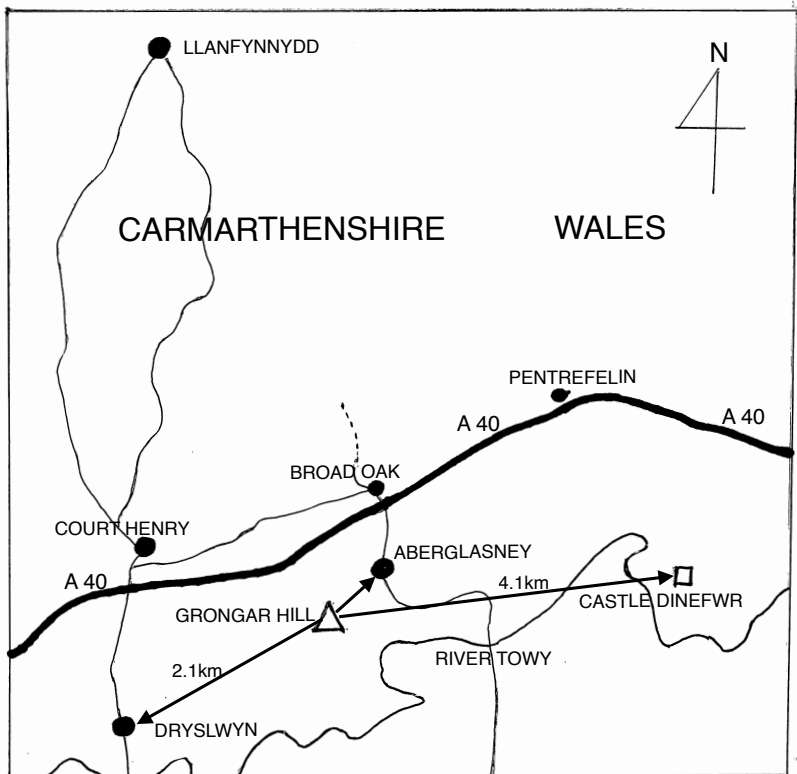
The Nottingham Trent University (Nottingham: 2000). 後者は綴り、句読点にも注意を払った優れた版である。

8. Garland Greever. "The Two Versions of 'Grongar Hill'" . *The Journal of English and Germanic Philology*, Vol. 16, No. 2 (Apr., 1917), 274-81. Eprint.
9. Mary Theresa Griffin. "Dyer's Grongar Poems and 'Picturesque' Sensibility." *Studies in English Literature, 1500-1900*, Vol. 21, No. 3, Restoration and Eighteenth Century (Summer, 1981), 458. Eprint.
10. William Gilpin. *Observations on the River Wye, and Several Parts of South Wales, etc. Relative Chiefly to Picturesque Beauty Made in the Summer of the Year 1770*. Printed for R. Blamire and sold by B. Law and R. Faulder. (London: 1782). 61.
11. *The Poetical Works of Mark Akenside and John Dyer*. Ed. Robert Aris Willmott. George Routledge and Co. (London and New York: 1855). 18. The text of the poem is taken from this. 18-21. Ebook.
12. Ralph M. Williams. *Poet, Painter, and Parson: the Life of John Dyer*. Bookman Associations (New York: 1956). 62. Willmott. Ibid. xiii.
13. Willmott. Ibid. viii.
14. オールド版「グロンガーの丘」には、第2連という早い段階で、一度だけだが「病氣」に関する言及が登場し、"Oft, my sick Mind serene Refreshment took" (17) (時折、我が病みし心は... 静かに安らいだ) と記されている。ただ、はっきりと "my sick *Mind*" (我が病みし心) と表現しているから、字義通りに取れば身体的な状態というより、心の悩みと解すべきであろう。とはいえ、自然との交流が「病」を癒すという発想が登場するということは注目すべき点であろう。他方、残念ながら、8音節版には直接的に照応する表現は見当たらない。審美的な姿勢は別として、全編道徳的人生訓に終始している。
15. このように公表された作品の中で用いられる婉曲的な表現とは異なり、私的な覚書に残されている「1729年死亡」云々というダイアロー自身が作成した墓碑銘のことを考慮すると、直前の時期に厳しい不具合を抱えていた

ことは疑いない。下記参照。

Willmott. Ibid. xxvii. W. Hylton Longstaffe. "Notes Respecting the Life and Family of John Dyer, the Poet. No. V." *The Patrician*. Ed. John Bernard Burke. Vol. V. E. Churton (London: 1848) 229. Ebook.

16. Norman Callan. "Augustan Reflective Poetry" . Ed. Boris Ford. *From Dryden to Johnson*. The Pelican Guide to English Literature, 4. Pelican Books (Harmondsworth, Middlesex; Baltimore, Md.; Toronto, Ontario; Mitcham, Victoria: 1957). 362-63.
17. Willmott. Ibid. vii. W. Hylton Longstaffe. "Notes on the Life and Writings of John Dyer, the Poet. No. 2." *The Patrician*. Ed. John Burke. Vol. IV. E. Churton (London: 1847). 266-67. Ebook.



GRONGAR HILL, from the Savage 1726 edition グロンガーの丘（ピンダロスオード風）

I.

Fancy! Nymph, that loves to lye
 On the lonely Eminence;
 Darting Notice thro' the Eye,
 Forming Thought, and feasting Sense:
 Thou! that must lend Imagination Wings,
 And stamp Distinction, on all worldly Things!
 Come, and with thy various *Hues*,
 Paint and adorn thy *Sister* Muse.
 Now, while the Sun's hot Coursers, bounding high;
 Shake Lustre on the Earth, and burn, along the Sky.

II.

More than *Olympus* animates my Lays,
 Aid me, o'erlabour'd, in its wide surveys;
 And crown its Summit with immortal Praise:
 Thou, awful *Grongar!* in whose mossy Cells,
 Sweetly-musing *Quiet* dwells:
 Thou! deep, beneath whose shado'wy Side,
 Oft, my sick Mind serene Refreshment took,
 Near the cool winding of some bubbling Brook:
 There have I, pensive, press'd the grassy Bed,
 And, while my bending Arm sustain'd my Head,
 Stray'd my charm'd Eyes o'er *Towy's* wand'ring
 Tide,
 Swift as a Start of Thought, from Wood to Mead,
 Glancing, from dark to bright, from Vale to Hill,
 Till tir'd Reflection had no *Void* to fill.

I.

空想よ！—並ぶものなき高みに
 好んで身を横たえる妖精—
 眼光鋭き視線を走らせ、
 想いを巡らせ、五感を楽しませる。
 5 この世のあらゆる事象に相違を刻印する
 そなたよ、想像力に翼を貸してくれないか！
 さあ！ そなたの様々な彩りを用いて
 姉である詩神のために、色を塗り、飾ってくれ。
 太陽神とその車を引く熱き馬たちが、天をかけ上がり、
 10 大地に輝きを振りまきつつ、白熱と化し大空を疾
 駆しているうちに。

II.

オリュンポスがわたしの歌を活気づける以上に、
 畏きグロンガーよ力を貸してくれ、
 広き視界の中で四苦八苦している私を、
 頂に不滅の讃歌を捧げるために
 15 汝の苔むす草葉の陰には
 「静寂」が物思いつつ住まう。
 時折、我が病みし心は汝の陰なす山腹を降りて、
 折れ曲がる小川の涼しきほとりで、静かに安らいだ—
 草地に身を下ろし、曲げた腕を枕にして、
 20 わたしは物思いに耽つたものだ—
 蛇行するトウイ川に惚れ惚れと視線をさ迷わ
 せ、
 森から牧場へと思いのままに、ちらほらと、
 陰から日向へ、谷間から丘へと目を移し、
 想像力が疲れ果て、想いを馳せるものが尽きる時
 まで。

III.

Widening, beneath the Mountain's bushy
 Brow,
 Th' unbounded Landskip softens off below;
 No skreeny Vapours intervene;
 But the gay, the splendid Scene,
 Does Nature's smiling Face all *open* show,
 In the mix'd Glowings of the tinctur'd *Bow*.
 And, gently changing, into soft and light,
 Expands immensely wide, and leads the *journeying*
 Sight.

IV.

White, on the rugged Cliffs, Old *Castles* rise,
 And shelter'd Villages lie warm and low,
 Close by the Streams that at their *Bases* flow.
 Each watry Face bears pictur'd Woods, and Skies,
 Where, as the Surface curls, when Breezes rise,
 Faint fairy Earthquakes tremble to the Eyes.
 Up thro' the Forest's Gloom, distinguish'd, bright,
 Tops of high Buildings catch the Light:
 The quick'ning Sun a show'ry Radiance sheds,
 And lights up all the Mountain's russet Heads.
 Gilds the fair Fleeces of the distant Flocks;
 And, glittering, plays betwixt the broken Rocks.
 Light, as the Lustre of the rising Dawn,
 Spreads the gay Carpet of yon level Lawn:
 Till a steep Hill starts horrid, wild, and high,
 Whose Form uncommon holds the wond'ring Eye;
 Deep is its Base, in *Towy's* bord'ring Flood,
 Its bristly Sides are shagg'd with sullen Wood:
 Towers, ancient as the Mountain, crown its Brow,
 Aweful in Ruin, to the Plains below.
 Thick round the ragged Walls pale Ivy creeps,

III.

樹木に覆われた山頂から見下ろすと、眼下に広が
 25 る—
 果てしない風景が色彩を和らげつつも、
 景色を遮る霧は消え去り、
 淡色の天穹の様々な輝きの下で
 明るく冴え渡る眺めを、
 30 微笑む自然は、余すところなく露わにする—
 さらに、柔らかく、軽いものへと滑らかに変化し
 ながらも、
 広大無辺の姿を現前しつつ、旅する眼を導いてく
 れる。

IV.

周りの岬々たる懸崖には白光を放ちつつ古城が聳え、
 下方にある村々は強風を避けて暖かく、
 35 谷底を流れる小川の近くに位置を取る。
 いずれの川面も森や空の姿態を抱きながらも
 風の立つ時はさざなみを起こして
 かわい地震に微かに揺れているのが目に映る。
 木立の薄暗がり突き抜けるほどの高さを誇る建物は、
 40 てっぺんに光を帯びて、鮮やかに輝く威容を示す。
 はやる太陽は溢れる光を振りまき、ものを活気づけ、
 朽葉色をした山頂の一つ一つを照らし輝かす。
 遠くで群れをなす羊の毛皮を金色に染め、
 割れた岩間で戯れては眩しい光をきらめかせる。
 45 夜明けの光の輝きと同じ輝きを
 遠くに見える草地の鮮やかな絨毯は繰り広げた。
 次の瞬間、険しい山が荒々しく、恐ろしげに身を起こし、
 並々ならぬ形姿は訝しむ目を釘付けにする—
 その根元は地域を分つトウイ川の下深くにまで達し、
 50 薄暗い森が、けば立つ山の脇腹を覆っている。
 山と同じく古くから聳え、頂に居並ぶ数個の塔は
 廃墟に混じっても、平地にいる人を畏怖させる—
 ごつごつの城壁を薄色の鳥が分厚く這い回り

Whose circling Arms the nodding Fabrick keeps; 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

V.

Once a proud Palace, This,—a Seat of Kings!
Alas! th' o'erturning Sweep of Time's broad
Wings!

Now, 'tis the Raven's bleak Abode,
And shells, in marbly Damps, the inbred Toad.
There the safe Fox, unfearing Huntsmen, feeds;
And climbs o'er Heaps of Stone to pendant Weeds.
The Prince's Tenure in his Roofs of Gold,
Ends like the Peasant's homelier Hold;
Life's but a Road, and he who travels right,
Treats Fortune as an Inn, and rests his Night.

VI.

Ever changing, ever new,
Thy Scenes, O *Grongar!* cannot tire the View:
Lowly Vallies, waving Woods,
Windy Summits, wildly high,
Rough, and rustling in the Sky!
The pleasant Seat, the ruin'd Tower;
The naked Rock, the rosy Bower;
The Village and the Town, the Palace and the Farm,
Each does, on each, reflect a doubled Charm;
As Pearls look brighter on an *Æthiop's* Arm.

VII.

Southward, along the Mountain's waving Side,
The Vale grows liberal, and the Prospect wide.

V.

この城もかつては立派な王宮、代々の王族たちの邸宅
だったのだ!
哀れ!何もかもを崩壊する「時」の巨大な翼の一撃!
今やここは吹きさらしのカラスのねぐら、
大理石の作る水溜まりは土着のガマが衣替えをする場所、
60 獵師を心配する必要のない狐が安心して乳を飲ませ、
岩の塊をよじ登り、垂れ下がる草の葉にじゃれついている、
王様の黄金の屋根の下に住む権威も
農夫の雨露をしのぐ小屋を保つ身分に落ちぶれる—
65 人の一生は通り過ぎる道、間違いのない旅を心得る者は
「運不運」をただの宿屋と定めて、夜の休息所を借りる
のみ。

VI.

常に変化に富み、常に新しく、
おおグロンガーよ!そなたの見せる景色は目を飽きさせず—
低地をなす谷間、風になびく木立、
70 恐ろしい高みを占めて強風に晒される頂は
自然のまま、天空の中、かさこそと音を立てている!
見晴らす立派な屋敷と崩れ落ちた塔、
苔むすことのない岩と薔薇の花咲かずまや、
村と町、宮殿と田舎家、
75 二者は倍の魅力を互いに投げかける—
真珠がエチオピア人の腕の上で一層の輝きを發揮す
るが如し。

VII.

南面に目を転じれば、山裾の波打つ川岸に沿って
谷はゆったりと広がり、眺望はふくらむ。

<p>Glowing, beneath a kind and purple Sky, Broad flower-dress'd Meadows and rich Pastures lie. 80 Green Hedges, in long Parallels, are seen; And silv'ry Lawns draw Streaks of Light between: Distant, those <i>Thorns</i> diminish'd scarce appear; As Dangers scape, unseen, that are not <i>near</i>. Smiling, like this fair Prospect, soft and gay, 85 The flatt'ring Glass of Hope our <i>Future</i> shows; But Ills, <i>at hand</i>, their Face, unmask'd display, And Fortune <i>rougher</i> still when <i>nearer</i>, grows: Still we tread, tir'd, along the same deep Way; And still the <i>present</i> proves a <i>cloudy</i> Day. 90 O, may I ever with my self agree, Nor hope the unpossess'd Delights I see! Nobly content, within some silent Shade, My Passions calm, and my proud Wishes laid: Ne'er may Desire's rough <i>Sea</i> beneath me roll, 95 Drown my wish'd Peace, and <i>tempest</i> all my Soul! While, idly busy, I but beat the Air, And, lab'ring after Bliss, embosom Care!</p>	<p>穏やかで赤みを帯びた空の下、花々が咲き誇る 広々とした採草地と豊かな放牧地は明るく 輝く。 緑の生垣が遠くまで二列に並ぶ様が目に入り、 その間を銀色に輝く芝地が光の縞となって走る— 棘をもつサンザシも遠くにあれば丈を低くして目立たず、 遠くにあつて、姿を見せず心をすり抜ける危機に似る。 美しいこの眺めが柔らかく、楽しいがに微笑むように、 希望の鏡はわれらにおもねり、美しき未来を映し出す— だが身近にある不幸は遠慮のない顔を包み隠すことなく、 運命は一步近づくと、その厳しい面を露わにする。 なおも我々は、いつもの深みを疲れを押して歩み、 どこまで行っても「ただいま」今日は曇りの日が続く。 おお、私が己れの定めを甘受して、目に浮かぶ 己れのものならぬ喜びを望むことのなきように! 激しい情熱を抑え、高き願いを平伏させて、 潔く心安らかに、静かな陰の内に止まらんことを! 心の奥底といえど、願望の荒海がうねりを立てて、 我が望みの平静を溺れさせ、我が魂を嵐に巻き込ませぬように! 無益なことに精を出して、空(くう)を叩き、 至福を求めてあくせくし、心労を抱え込む我が性分!</p>
---	--

VIII.

VIII.

<p>Here, while on humble Earth, unmark'd I lie, I subject <i>Heav'n</i> and <i>Nature</i> to my Eye; 100 Solid, my Joys and my free Thoughts run high. For me, this soft'ning Wind in <i>Zephyrs</i> sings, And in yon flow'ry Vale perfumes his Wings. To sooth my Ear, those Waters murmur deep; To shade my Eye, these bow'ry Woodbines creep. 105 Wanton, to yield me Sport, these Birds fly low; And a sweet <i>Chase</i> of Harmony bestow. Like me too yon sweet Stream serenely glides;</p>	<p>この丘で、相も変わらぬ大地に人目を引くことなく横たわり 私は天と自然を我が目に焼き付ける— まごう方なく、我が喜びと囚われぬ我が想いは高く舞い、 春風にひそむ和みの精は私のために歌い、 あの花咲く谷間に翼を羽ばたかせて、香気を振り撒く— ここかこの小川は、我が耳を慰めるべく、低い響きを立て— 絡みつく忍冬は、我が目を眩しき光から守るあずまやをな す— 戯れて低く飛ぶこの鳥たちは私に気晴らしを生み、 楽しき歌、調和の輪唱を恵み与える— かの川が、私と同じく、安らかに流れ、</p>
---	--

Just *views* and *quits* the Charms which tempt its

Sides:

Calmly regardless, hast'ning to the Sea,

As I, thro' *Life*, shall reach *Eternity*.

岸辺の美しき誘惑に視線をやりつつも、止まること

なく、

110 平然として目を背け、大海へと歩を速める様は、

私が一生涯を経て永遠界へと到達するために似る。

GRONGAR HILL, from the Lewis 1726 edition グロンガーの丘 8音節版

(Between-the-paragraph blank spaces, paragraph numbers, and line numbers are added.)

1
SILENT Nymph, with curious Eye!
 Who, the purple Ev'ning, lye
 On the Mountain's lonely Van,
 Beyond the Noise of busy Man,
 Painting fair the form of Things,
 While the yellow Linnet sings;
 Or the tuneful Nightingale
 Charms the Forest with her Tale;
 Come with all thy various Hues,
 Come, and aid thy Sister Muse;
 Now while *Phæbus* riding high
 Gives Lustre to the Land and Sky!
Grongar Hill invites my Song,
 Draw the Landskip bright and strong;
Grongar, in whose Mossie Cells
 Sweetly-musing Quiet dwells:
Grongar, in whose silent Shade,
 For the modest Muses made,
 So oft I have, the Even still,
 At the Fountain of a Rill,
 Sate upon a flow'ry Bed,
 With my Hand beneath my Head;
 And stray'd my Eyes o'er *Towy's* Flood,

1
 好奇心の強い目をした、沈黙の妖精よ!
 赤みを帯びた夕日の中、
 山の人気のない先端、立ち働く人々の
 話し声の届かない所で横になり、
 5 事物の姿を美しく思い描いている—
 あたりでは黄色のヒワが歌っていたり、
 時には、よい調べのサヨナキドリが
 森中を彼女の歌で魅了したりする—
 きみの絵の具をひとつ残らず取り揃えて
 10 ひとつ、きみの姉、詩の女神を手伝ってくれないか。
 太陽神が高みに昇って、地と空に
 輝きをもたらしている今のうちに!
 グロンガーの丘が僕の歌を誘いだすの—
 景色を明るく、力強く、描いてくれないか、
 15 グロンガーよ、きみの苔むす岩々の隙間には、
 「静寂」が楽しい空想に取りながら、住むという。
 グロンガーよ、きみの物音の消えた木陰、
 慎ましやかな詩の女神が居着くところでは、
 静かな夕べに、時折、僕は
 20 清水の湧き出す泉の傍で、
 花の臥所に腰をおろし、
 わが腕を枕にして
 トウイの流れる目をさ迷わせ、

- Over Mead, and over Wood, 25 牧場を見晴らし、森を見下ろし、
From House to House, from Hill to Hill, 25 家から家、丘から丘へと視線を移し、
'Till Contemplation had her fill. 「観想」が心ゆくまで楽しんだ。
- 2 2
- About his chequer'd Sides I wind, この後、日向と日陰のまじる山腹を曲がり下り
And leave his Brooks and Meads behind, 間近にある小川や牧場を後にして
And Groves, and Grottoes where I lay, 休憩所に使う小森や洞窟も、そして、
And Vistoes shooting Beams of Day: 30 陽の光を反射する見晴らしも通り過ぎるとー
Wider and wider spreads the Vale; 谷間は広くなり、なおも広がっていく、
As Circles on a smooth Canal: 運河の静かな面に浮かぶ幾重もの波紋に似て。
The Mountains round, unhappy Fate, まわりを囲む山々は、厳かな宿命よ!
Sooner or later, of all Height! 遅かれ早かれ、ただ今高さのあるものはいずれも
Withdraw their Summits from the Skies, 35 その頂を天空から引き下ろして
And lessen as the others rise: 丈を縮め、次の山々が聳え立つー
Still the Prospect wider spreads, まだまだ眺望は広がっていき、
Adds a thousand Woods and Meads, 何十、何百の森や牧草場が加わり、
Still it widens, widens still, なおもまだ広がり、まださらに広がりー
And sinks the newly-risen Hill. 40 新たに立ち上がった丘さえも沈む。
- 3 3
- Now, I gain the Mountain's Brow, 今や僕はグロンガーの頂の突端を極めたー
What a Landskip lies below! なんとこの光景が眼下に横たわっていることか!
No Clouds, no Vapours intervene, 雲ひとつ、霧ひとつ立ちふさがるものはなく、
But the gay, the open Scene 晴れやかな、広々とした景色を
Does the Face of Nature show, 45 大自然はおもてに晒すー
In all the Hues of Heaven's Bow! 天穹の備えるありとあらゆる色彩を浴びて、
And, swelling to embrace the Light, 膨れ上がった風景は降り注がれた光を抱きとめて
Spreads around beyond the Sight. 視界の下で四方に展開する。
- 4 4
- Old Castles on the Cliffs arise, 古城が、あちこちの崖の上に、立ち上がり、
Proudly tow'ring in the Skies! 50 威風堂々と空に聳える!
Rushing from the Woods, the Spires 森の木立から突き出た尖塔は、
Seem from hence ascending Fires! ここからは、天に駆け昇る炎に見える!

Half his Beams *Apollo* sheds,
On the yellow Mountain-Heads!
Gilds the Fleeces of the Flocks;
And glitters on the broken Rocks!

5

Below me Trees unnumber'd rise,
Beautiful in various Dies:
The gloomy Pine, the Poplar blue,
The yellow Beech, the sable Yew,
The slender Firr, that taper grows,
The sturdy Oak with broad-spread Boughs.
And beyond the purple Grove,
Haunt of *Phyllis*, Queen of Love!
Gawdy as the op'ning Dawn,
Lies a long and level Lawn,
On which a dark Hill, steep and high,
Holds and charms the wand'ring Eye!
Deep are his Feet in *Towy's* Flood,
His Sides are cloth'd with waving Wood,
And antient Towers crown his Brow,
That cast an awful Look below;
Whose ragged Walls the Ivy creeps,
And with her Arms from falling keeps;
So both a Safety from the Wind
On mutual Dependence find.

6

'Tis now the Raven's bleak Abode;
'Tis now th' Apartment of the Toad;
And there the Fox securely feeds;
And there the pois'nous Adder breeds,
Conceal'd in Ruins, Moss and Weeds:
While, ever and anon, there falls,
Huge heaps of hoary moulder'd Walls.

55 太陽神アポロは光線の半分を注いで
山々のてっぺんを黄色く染める!
群れなす羊の毛皮を金色に輝かせ、
割れた岩々をきらきらと光らせる!

5

60 足下で木々は無数に林立し、
さまざまな色に美しく染め上がっている—
陰なすマツ、青色のポプラ、
黄色のブナ、黒色のイチイ、
細身のモミは上に行くほど尖っていき、
がっしりした体格のカシは大枝が広がっている。
赤みがかった色に染まる森—恋の女王フィリスの
いつもの遊び場—その森の向こうには
75 夜明けの光と同じくらい華々しく
草に覆われた長い平地が横たわる—
その上に鎮座する暗い丘は急勾配で小高く、
辺りを見渡す目を引き留めて、魅惑する!
丘の脚部はトウイ川の深みに浸かり、
腹部は風に波打つ森に覆われ、
頭部を飾っている往時の塔は
威厳のある眼を足下に投げかけている。
粗造りの壁面を蔭が這い回り、その腕で
崩落を防いでいるらしいところを見れば、
両者は互いのうちに助けの手を見出し、
風の攻撃から身を守っているのだ。

6

80 今や塔はカラスの無残な住居、
ある時はヒキガエルの住みかとなり、
あるいはキツネが安全に子育てをしたら、
毒蛇が、建物の廃墟と苔と雑草に
匿われて子を産む場所となっている—
その傍ら、時折、朽ちて色の抜けた城壁の
巨大な岩の塊が崩れ落ちることもある—

Yet Time has seen, that lifts the low,
 And level lays the lofty Brow,
 Has seen this broken Pile compleat,
 Big with the Vanity of State;
 But transient is the Smile of Fate!
 A little Rule, a little Sway,
 A Sun-beam in a Winter's Day
 Is all the Proud and Mighty have,
 Between the Cradle and the Grave.

7

And see the Rivers how they run,
 Thro' Woods and Meads, in Shade and Sun,
 Sometimes swift, sometimes slow,
 Wave succeeding Wave they go
 A various Journey to the Deep,
 Like human Life to endless Sleep!
 Thus is Nature's Vesture wrought,
 To instruct our wand'ring Thought;
 Thus she dresses green and gay,
 To disperse our Cares away.

8

Ever charming, ever new,
 When will the Landskip tire the View!
 The Fountain's Fall, the River's Flow,
 The woody Vallies, warm and low;
 The windy Summit, wild and high,
 Roughly rushing on the Sky!
 The pleasant Seat, the ruin'd Tow'r,
 The naked Rock, the shady Bow'r;
 The Town and Village, Dome and Farm,
 Each give each a double Charm,
 As Pearls upon an *Æthiop's* Arm.

だが「時」は見てきた。低きを上げ、
 85 高きを平坦に倒す「時」は、
 この壊れた瓦礫の山の、威儀を備えた
 かつての完璧な姿を見てきた—
 運命の微笑みは一時!
 ささやかな統治、ささやかな支配、
 90 冬の日に差し込む一条の陽の光、
 それこそが高慢な勢力者が揺籠から墓場
 までの間に手にするすべてのものだ。

7

いろいろな川の流れるさまを見るがよい、
 森と牧草地、陰と日の当たる場所を通り抜け、
 95 時に素早く、時にゆったりと
 波また波を立てつつ、川は進む、
 変化のある旅を経ながらも、大海へと—
 まさしく人の一生が氷の眠りに向かうのに似る!
 かくして、大自然の面を被う様々な事物は
 100 われわれのさ迷う分別を導き給う。
 かくして、大自然は緑の晴れ着をまとい
 われわれの憂いを払ってくれる。

8

いつも魅力的で、いつも新しい!
 いつか風景に目が飽きる日が来るのだろうか!
 105 滑り落ちる泉の水と流れる川!
 低く位置して、暖かく、木々に満ち溢れる谷と
 天空に荒々しく突進するような、
 高くして、人気のない、風の吹く山頂!
 心地よい住居と崩れ落ちた塔、
 110 むき出しの岩と陰なすあずま屋、
 町と村、円蓋のある建築と農家の住居—
 両者が互いに魅力を倍加する様は
 真珠の飾りとエチオピア人の腕に似ている。

9

See on the Mountain's southern side,
Where the Prospect opens wide,
Where the Ev'ning gilds the Tide;
How close and small the Hedges lie!
What streaks of Meadows cross the Eye!
A Step methinks may pass the Stream,
So little distant Dangers seem;
So we mistake the Future's face,
Ey'd thro' Hope's deluding Glass;
As yon Summits soft and fair,
Clad in Colours of the Air,
Which, to those who journey near,
Barren, and brown, and rough appear;
Still we tread tir'd the same coarse Way.
The Present's still a cloudy Day.

10

O may I with my self agree,
And never covet what I see:
Content me with an humble Shade,
My Passions tam'd, my Wishes laid;
For while our Wishes wildly roll,
We banish Quiet from the Soul:
'Tis thus the Busy beat the Air;
And Misers gather Wealth and Care.

11

Now, ev'n now, my Joy runs high,
As on the Mountain-turf I lie;
While the wanton *Zephyr* sings,
And in the Vale perfumes his Wings;
While the Waters murmur deep;
While the Shepherd charms his Sheep;

9

丘の南面に目を向けてみようか。
眺望は大きく開け、
夕日が水面を朱に染めている。
幾筋の生垣が何と近くに、何と小さく見えることか!
幾列もの牧草地の並びが目を横切る!
ただ一歩で川を渡れそうな気さえするが、
120 遠くの危険はそれほど小さく見えるものだ—
同じく、われわれは未来の顔を見違える
希望という欺きの望遠鏡を通して眺める時に。
遠くにあるあの柔らかく綺麗な頂も
大気の色彩を帯びてそう見えるが、
125 苦勞を厭わず近寄って眺めれば、
褐色の、草木の育たない、荒地の姿を現す。
人はいつものでこぼこ道を歩み続け、
この世は相変わらず曇り日だ。

10

ああ、僕が自分の定めになら得して
130 目にするものを羨まないように—
慎ましく目立たぬ人生に満足し、
情熱を大人しくさせ、願望を寝かしつけたいものだ。
願望が荒れ狂っているうちは
僕たちは心から平静を追い払うことになる。
135 そうして多忙な人々は空(くう)を打ち、
欲ばりは富と気苦勞を蓄える。

11

今、ただ今、僕の喜びは満ち溢れる。
山上の芝地の上に横たわり
気まぐれな春風の神が歌を歌い
140 翼を羽ばたいて谷に香氣を振り撒いている—
水の流れは低く吹き、
羊飼いは羊たちを草笛で魅了し、

While the Birds unbounded fly,
 And with Musick fill the Sky.
 Now, ev'n now, my Joy runs high. 145

12

Be full, ye Courts, be great who will;
 * Search for Peace with all your skill:
 Open wide the lofty Door,
 Seek her on the marble Floor,
 In vain ye search, she is not there; 150
 In vain ye search the Domes of Care!
 Grass and Flowers Quiet treads,
 On the Meads, and Mountain-heads,
 Along with Pleasure, close ally'd,
 Ever by each other's Side: 155
 And often, by the murm'ring Rill,
 Hears the Thrush, while all is still,
 Within the Groves of *Grongar Hill*.
 * Missing in the 1726 Lewis edition.

鳥たちは自由気ままに飛び回り、
 歌声で大空を満たす。
 今、ただ今、僕の喜びは満ち溢れる。

12

宮廷よ臣下で溢れよ、望む者は出世するがいい、
 [精一杯の術を尽くして「平安」を探し出せ、]
 丈高い豪華なドアを広く開け、
 大理石の床の上にかの人(「平安」)を見つけよ。
 どれほど探そうと、そこにはかの人は見つからず。
 気苦勞の絶えない円蓋建築の中に求めても無益だ!
 「静寂」は草や花の間を
 牧草地や山の頂を歩む—
 「楽しみ」と手をつないで、
 いつまでも互いのそばを離れずに—
 時には、さらさらと流れる小川のほとり
 あたりが静まっている間にツグミの声を聞いている、
 グロンガーの丘の林の中で。

(元奈良県立医科大学臨床英語准教授)